



倭漢朗詠集卷下



倭漢朗詠集卷下

雜

草 曉 風

鶴 松 雲

猿 竹 晴

管絃

付弄妓

文詞

付遺女

酒

山

付山水

水

付漁父

禁中

古京

古宮

付奴宅

仙家

付道士  
隱倫

山家

田家

隣家

山寺

佛事

僧

閑居

眺望

饑別

行旅

度車

帝王

付法皇

親王

付皇孫

丞相

付執政

將軍

刺史

詠史

王昭君

妓女

遊女

老人

交友

懷舊

述懷

慶賀

祝

忘

無常

白

雜

風

春風暗剪庭前樹  
夜雨低穿石上苔  
入松易亂欹  
拙明君之魂  
流水不歸  
應送列子之乘  
漢主手中吹不歸  
徐若塚上三  
廟程懸

班姬載扇應誇尚列子懸車不往還  
あさこのせのうらりつひてもとほぬら  
たまの怒さしほをほりてあり  
か乃くやありあけの月れ月計は  
りみらふささぬらと心なれしのせ

雲

竹斑湘浦雲凝鼓瑟之蹤鳳去秦

臺上月老吹簫之地

山遠雲埋行客泣松寒風亂破樓人夢

盡日望雲心不轉有時見月夜正閑

澄皓遊秦之朝望磁孤峯之月陶

朱祥越之暮眼濕子湖之煙

暫借崑崙戴石之仙後冷雲生林

漢帝龍顏迷處所  
淮王雞翅失回連  
まうにのぞいてや  
まなむかむ  
たまたまのまよひ

晴

煙消門外青山近  
霧重窓前綠竹低  
紫蓋之嶺嵐疎雲  
收七百里之外  
曝布之泉波次月  
澄甲下人之餘

雲消碧落天  
廣解風動清漪水  
西陂雙鶴出  
鼻披霧弄孤枕  
連水与雲消  
歸嵩鶴弄日  
高見飲酒龍弄  
雲不殘  
かすんけきそりの  
あうりひさか  
あふふいふ

曉

佳人畫鏡於晨粧  
魏文鐘動遊子愁

行亦殘月函谷鷄鳴

幾行南去之鷹一斤西傾之月

赴沔路獨行之子據店稍扁淫私

城百戰之師胡笳未歇

數粧金屋之中青城正處羅窗

瓊筵之上紅燭之餘

不聲之言海初明後一點之燈猶有城時

あつきのさくまーはさつゆの  
とこりまのきりまきーや

松

但有雙松當砌下更無一事到心中

青山有雪情松性松落無雪情猶心

子又凌雪夜吟愁康之姿百出就風

誰破者由之射

九夏三伏之暑月竹合錯予之風

去冬素雪之寒朝松新若子之德

十、云葉霜後落一十年色雪中深

合雨嶺松天更霽燒秋林葉火還寒

此句はなるらむ此の句はけり計あり

見みたりくひひくくかたりぬすまひりの

まきののひめさういりる面めん

あまうくふあう人うえのあひとひと

おひはひいりりともみりり此ま

竹

煙葉之家籠假夜色園枝蘭紙欲枯新

阮籍嘯場人出月子猷者處身極極

晉駢兵泰軍王子猷栽稱此君唐太



子賓客白樂天愛吾友

遊筆未抽鳴鳳管盤根繞點卧龍文

うきりしあしを古よの紫けさくれ竹の  
うきりしあしを古よの紫けさくれ竹の

草

沙頭雨濛濛草一水面風駭駭波

西施顔色今何在春有風百草頭

飄蕩草屬空草濼頰測之卷藜藿

深鏤雨濕原意之極

草色雷晴初布護鳥聲初暖漸綿密

善山有馬蹄狂瀉傳野無人路漸滋

かのさうりあつてもさかえりまはまさんさうはくさあさん  
おはあさあさのさうりたーたあおいあしあ  
こほもさああさあさあ人ああ

やうきとくはあんなか  
うけのりまうせしん  
野々

鶴

過少人而踏高位鶴有乘行惡利  
口之覆邦家雀能穿屋

同孝陵之入胡但見異類似屈原之

在楚衆人皆解

聲 承杭上子年鶴氣流蓋中亦老拳

清暖敷聲松下鶴寒光一花竹間燈

後并庭前花落處教聲池上月明時

鶴歸舊里丁令威之詞可聽籠迎新

儀陶安公之駕在眼

飢能性疏志乳老鶴心閑緩之眠

川漢遠發孤枕夢和風  
清入水綠疎  
竹ののこりに素々  
たりと身はひくを  
たえ  
のへとらしてふ  
るさこわる  
たはふのしき  
いふをらた  
さ  
あふ  
るゆかあり  
たおる  
れ  
あふ  
うせ  
あけ  
井の  
こ  
わ  
ら  
れ  
あ  
ら  
う  
あ  
ら  
う  
あ  
ら  
う  
あ  
ら  
う

猿

猿其霜滿一聲之玄鶴  
廢天已去

秋深五夜之氣猿川月

江流已使初成字  
猿過望陽始新鵬  
三聲猿後垂鄉渡  
一葉舟中載病身  
胡鷹一聲秋破  
高客之夢已猿之  
川  
曉  
霜  
沾  
行人  
之  
裳

曉  
曉  
猿  
羅  
洋  
猿  
一  
川  
暮  
林  
花  
語  
鳥  
啼

谷靜晚同山名倍拂光斜踏使徒  
こころいらいまゝもてあしき  
たまのいらいまゝもてあしき

管絃 付舞妓

一聲鳳管秋驚鳥秦嶺之雲數拍  
霓裳曉送維山之月

第一第二絃 素々秋風拂松疎韻落

第三第四絃 冷々夜鶴憶子籠中鳴

第五絃聲 尤掩抑瀧水凍咽流不得

随分管絃 還自足等閑篇詠被人知

頻令燈下裁衣婦 誤剪同心一斤花

羅綺之為重 衣妬無情於機婦

管絃之在長 曲怒不関於伶人

落梅曲舊脣月吹雪折柳聲新半掬煙  
相如昔批文君得莫使簾中子細聽  
ふらふらゆきりこぼれりつとわがうら  
うれ乃とてりさるへるけき

文詞付遺文

沈詞拂恍若游魚銜釣出深澗之感  
浮藻連翩若翰鳥嬰繳陸雷雲後  
遺文三十軸神々金玉聲龍門原上

去埋骨不埋名

言語巧偷鸚鵡舌文章分得鳳凰毛  
錦帳曉開雪舞殿白珠秋寫水精盤  
昨日山中之木才取諸己今日庭  
前之花詞悲於人

王朗の素之孫撫徐庶事之意  
江淹一対之友集范別駕之遺文  
陳孔璋伺之愈病馬相公賦只讀  
贈甯新恩銘刻石獲麟後集世念直  
心はのりのふまきこころをいひけ  
うみのとみこころをいひけ  
百

新若海を清くしお鶴鶴を中志  
示新若海を清くしお鶴鶴を中志  
萬年を裁つる刻石偏嗜酒地  
海湛る清くしお鶴鶴を中志  
示新若海を清くしお鶴鶴を中志  
以風抄秋後對酒者其人

疎水の霧が紫霞の如く是を

生計の極まりは是れを以て海を以

て業結ぶ友の如く海を以て業結ぶ友

の如く業結ぶ友の如く海を以て業結ぶ

酔ひては國四時を待たずして海

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

酒を以ては舟の如く海を以て業結ぶ

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

舟の如くは舟の如く海を以て業結ぶ

山

黛色迥臨蒼海上泉聲遙落白雲中  
勝地本來無定主大都山屬愛山人  
夜鶴眠驚鳥松月苦曉鶻飛落峽煙寒  
紈扇拖來青黛露羅帷卷却翠屏明  
衆籟曉興林頂老群源暮叩谷心寒

なのみーてやまはみかさもなかりけり  
あさいゆふいのさすにうありけり  
とものおるこーのーらやまにいにけり  
にほくのこーのゆまつもりつ  
みわたせばはまつのはーあさよしのま  
いくよつもれるゆきにかあるらし

山泉

泰山不讓去壤故能成其高河海  
不厭細流故能成其深



已猿一川停舟於明月  
曉之昏胡馬忽嘶失路  
書黃砂磧之堯

殿日暮山青嶺之漫天  
秋水白茫漁舟火影  
寒燒浪驛冰鈴聲和  
邊山山似屏風江似  
篆印船來在月明中

草木枝疎春風極山  
祇之駿魚驚絕迹戲  
林水穿汀伯之民

韓康獨往之樓花藥  
水意泥餐扁舟之泊  
煙波堆新

山復山何工削成青  
巖之形水復水誰家  
深出碧潭之

山邈遠樹雲開雲海  
峯如村日界時



移樽志味少 病後子感極 留一過時  
沙以刻尔 鶴遊雲又 有極權 去腐乃固  
日御波尔 子西書 風以書 家乃風 實  
あゝき 越二天 花乃 かり 漸 之 少 秋 乃 波  
と 程 の 一 味 と 也 々 も 亦 と 以 事 論 之  
美 耶 加 乃 影 乃 法 又 地 乃 々 々 亦 礼 志 書 の 世 亦  
あゝき 花 乃 寸 而 留 塘 川 の 三 津

禁中

風波は而 新林 身 新 歌 亦 以 乃 書 出  
秋月乃 物 空 忘 亦 仙 乃 抄 歌 禁 園 乃  
平 仙 人 誰 乃 於 昔 之 爾 角 乃 及 時 乃  
鶴 人 曉 唱 祥 一 強 乃 的 々 々 眠 乃 中 鐘 歌  
鳴 響 激 晴 々 々 々 然  
物 作 日 乃 高 新 歌 接 暫 乃 沙 厚 後 乃 信

新りあふきふりあふきし能くあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき

志東

あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき  
あふきあふきあふきあふきあふきあふき

孤光竟露啼 幼粉當鳥梅 風竹清  
首必能見 空海枯葉 泣涼洞中 風竹於  
向晚 猶以生 白露 於青 庭 庭 人 生  
こみまてり あり たり あり あり あり  
うらひのり くるみ たり たり たり  
まゝんまて あれ たり あり あり あり  
月のり あり 神を あり あり あり  
いふ へは あり あり あり あり あり  
あり あり あり あり あり あり

仙家 付道士 隱倫

燻中 天地 乾坤 外 夢 裏 身 名 且 暮 間  
藥 爐 有 火 丹 應 伏 雲 確 無 人 水 自 春  
山 底 採 薇 雲 不 歇 洞 中 栽 樹 鶴 先 知  
三 臺 雲 浮 七 万 里 之 程 分 浪 五 城  
霞 峙 十 二 樓 之 構 擁 天

奇犬吠花聲  
滿於紅桃之浦  
驚風振葉香  
分紫桂之林

認入仙家  
雖為半日之客  
恐歸

舊里繞逢  
七女之孫

丹竈道成  
仙宮靜山中  
系色月華  
似

石床留洞  
風之松玉  
東枕丹為  
物

桃李亦多  
春風吹香  
花散月中  
影

玉露一  
如雪  
白如  
冰

高上月落  
林樾  
影如  
披

意清  
如雪  
白如  
冰

直道  
如雪  
白如  
冰

如雪  
白如  
冰

如雪  
白如  
冰

山家

遺愛寺鐘鼓枕聽香爐峯雪撥簷看  
蘭省花時錦帳下廬山雨夜草菴中  
漁父晚船分浦釣牧童寒笛倚牛吹  
王尚書之遠府憲則懸恨唯  
紅顏之廣愁山中較之竹林幽則

幽趣殆非素論之士

南望則有開路之長行人征馬駉  
驛丁於翠下簾之下東顧亦有林塘  
之妙紫鴉白鷗逍遙在朱檻之前  
山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲  
洞戶多幽在眼若竹煙杉霧之色





まゝのふく 我々も如くしあふはのこ  
らふ業をいふとあまの御子のあま

詠事

四月好月之淫熱殊極 宜化あま  
の神跡身数おもひ子孫を他福焼人  
は急ぎあま是如く人の中法は殊者  
に諸 落枕は都くかゝる者もあま

善種逢禱若くはあま 晴浪滔天  
かたき かくし かくし  
ふろ かくし かくし かくし

山寺

千株松下雙峯寺 一葉舟中万里身  
更無俗物當人眼 但有泉聲洗我心  
不改朝天之門 便作求車之所不憂

閱水之槁以為到岸之途  
策馬來肯只思風煙豈可翫  
逢僧談處漸覺世俗之皆空

人如鳥路穿雲出地是龍門  
越水登三千世界眼前盡  
十二日緣心裏空  
泉飛雨洗聲聞夢  
葉落風吹色相秋

山々々々いりあひのり祿のいふ  
くもくれぬとさく飛りひき  
木のも枝ともみともれるもの  
もれみるいもりもりぬき

佛事

月隱重山步擊扇喻之風息大虛  
步動樹教之  
願以今生世俗文字業狂言綺語之

誤翻為當來世之讚佛乘曰轉法輪  
之緣

百千万劫菩提種八十三年功德林  
十方佛土之中以西方為望九  
品蓮臺之間雖下品應足

雖十惡步猶引攝甚於疾風之披  
雲霧雖一念步必感應喻之巨海  
之納消露

昔切利天之安居九十日剌赤梅檀  
而攝尊容今拔提河之滅度二千年  
治紫磨金而礼兩足

浪洗欲消鞭竹馬而不願雨打芴

破鬪芥鷄而長忘

念極樂之尊一夜山月正圓先句曲  
之會三朝洞花欲落

玉磬聲思絃管奏衲衣僧代綺羅人  
眼蓮豈養清涼水面月長留十五天  
以佛神通半酌盡經僧祇劫欲朝宗

叩凍負來寒谷月拂霜拾盡暮山雲  
已終未習千季役初得難逢一乘女

いししとあしとあつとひしわあし  
のりしとあしとあつとひしわあし  
あしとあしとあつとひしわあし  
いししとあしとあつとひしわあし  
このよめしとあしとあつとひしわあし  
あしとあしとあつとひしわあし

何れもいふ難く  
いふもふ果かあせし  
ま

僧

蒼茫霧雨之霽初寒汀鷺立重疊  
煙嵐之斷處曉寺傍柳

野寺訪僧歸帶月芳林拈客解眠花  
堂有母儀真以逗函於中夫之月家

有所延真以偃息於五臺之寺

明鏡乍開隨境照日雲不着下山來

觀空淨侶心懸月送老高僧首剃霜

鶴閑翅刷子年雪僧老眉參八字霜

たらしまはる果終しとくしとくま

わらわらとるそほやありけそ

よの中ふしれらまのなあり

あひのいつていそくま

ミワケのさうらゐりしすまゐり  
つらとらふまゝやけり

闲居

不獨記東都履道里有闲居泰適  
之說心令念皇唐大和歲有理也  
樂之音

官車一在橋甚心十二長空際

難追綺羅之三千暗老

幽思不窮深卷無人之處  
慈暘欲斷

闲忘有月之時

鶴籠開處見君子  
事卷展時逢故人

人間榮耀因緣淺  
林下幽闲氣味深

官途自此心長別  
世事從人今日不言

蕙帶羅衣袖簪於北山之小蘭杭  
桂檄鼓舷於東海之東

都府樓統者瓦色觀音寺只聽鐘聲  
晦臨東抱若徑月避喧猶外竹窅風  
陶門流絕春朝雨燕寢久衰杖藜  
わくやとはみらとるまゝいままゝくあまゝりーろり  
つらまゝさ一人とらゝりていゝまゝ

鴨渚

風翻白浪花千斤鴈點青天字一行  
出紫園而東望山岳半排雲根暗  
躋翠嶺而西顧家鄉志沒煙樹深  
見天台山之高巖四十尺波白豎  
長安城之遠樹百千萬蒼蘚青

江霞隔浦人烟遠湖水平連天  
鴈愁遠一行斜鴈重端城二月餘  
花野外飛光眼易迷殘雨後春情  
難整夕陽前

錢別

與君後會未知何處為我今朝畫一盃

前年程遠馳忠於鴈山之暮春雲  
會期遙霑纓於鷓鴣之曉渡  
昔飛丹鳥競寸陰於十五年之間  
今促盡熱飲分年於三百盃之後  
楊歧路滑我之送人多年李門  
人之送我何日



万里東來何再日 一生西望是長襟  
九枝燈盡唯期曉 一葉舟輕不待秋  
欲以浮生期後會 還悲石火向風吹  
夢心何處 一川如畫 一水如環  
一水如環 一水如環 一水如環  
一水如環 一水如環 一水如環  
一水如環 一水如環 一水如環  
一水如環 一水如環 一水如環

仙極

孤館宿時風帶雨 空舫水連雲  
仙之重約之明月 雙之曉各不盡時  
溪畔之長風 浦之暮色 猶涼  
曉入長松之洞 叢泉咽而嶺結  
吟聲看極浦之波 畫嵐吹而

T

皓月吟

渡口歸船問定出波頭禱處日晴看  
洲蘆夜雨他鄉渡岸柳秋風遠塞情  
蒼波路遠重千里為霧山深鳥一翔  
かのくともあしれいものあさかりり  
志まかむきしゆぬきそらふ  
ゆめはけちやあまのけいしちかめ  
んははけいあしはらふ

だよりあふふふふふふふふふふふふ  
くふふふふふふふふふふふふふふ

度中

年長安易持甲子春とて初きや度中  
らるま終冬も少度中初生曉光重  
たふれめのえはらうふふふふふふ  
あふはらうふふふふふふ

常日

漢高三尺之鈿坐制諸侯張良一卷  
之書立堂即傳

頊疾之會鴻門寄情於一席之客漢  
祖之歸沛郡傷恩於四方之風

四海安危照掌肉白王理亂懸心中

幸逢堯舜無為仁得作犧皇何止人

聖皇自在長生殿不向蓬萊王母家

仁滿秋津洲之外惠茂瓊波水之陰

淵空作瀨之聲寐之閑口砂長為教

之碩洋之滿耳

梁元首遊春王之月漸落周穆新

會西母之雲欲歸

布政之庭風流未必歎於真國  
者此地也好文之世德記未必光于黃  
矣兼之者我君也

榮啓期之秋三樂未到常樂之門  
皇南德之述百王於暗法王之道

玉宸日臨文鳳見紅隄風卷畫龍揚

刑鞭補朽蠶之空玄陳鼓昔深鳥不驚

あまのつりりささやこのふれあひさか  
いはもろくもささやあはれ

らりぬれとまきいふふささはさ記ぬり  
ふさのささはあまのま

親王 付王 孫

庫車狀鞞貴公之青衫細馬真家  
東平茶茹之雅量寧非漢白鹿貴

雙之弟式桂陽鑠之文辭志是磨  
帝寵愛弟八之子也

江都之好劫捷也七尺屏風其德高  
淮南之收神仙也一旦乘雲而行卷  
開卷已知為子道秋風悵望斷湖雲  
我王孝行先何到梧油秋風一斤煙

此花非是人間種瓊樹枝頭第二花  
此花非是人間種再卷平甚一片霞  
いふかふやと見のをなは乃いふは  
わのねはさまのふれいりせれめ

坐相 付執改

季文子妻不衣帛魯人以為美談  
孫弘身服布被汲黯譏其多節

百里奚乞食於道路穆公委以政  
穉飼牛於車下桓公任以國  
孫弘園圍無閑者傳說舟牝不借人  
西京席門乃是陳丞相之舊宅南山  
芝洞寧非穀司洗之幽栖  
周公且者文王之子武王之弟自

知其貴忠仁者皇帝之祖  
皇  
后之父世推其仁

傅氏教之嵐雖風雲於殿夢  
灑教陵瀨之水猶涇渭也漢躬之初  
春適夏闡表司徒之家雷應路達  
且南眷北鄭太尉漢風被人知

やまゝくくわんまゝくくまゝくく  
けふらくくくくくくくくくく

將軍

三人劔光氷在手一張弓場月當心  
雪中教馬朝奔冰雲外回鴻夜射嚴  
千里生涯征馬疲十年離別故人稀  
龍山雪暗李將軍之在家類水浪

困葵征虜之未仕

賊列席床陰換武常書漢四七將軍  
抽麟角逆味又素書魯二下篇  
雄劍在腰拔則秋霜三尺雄黃自口  
吟志寒玉一聲

地跨細奴便地起死馬志在為欲為人

たましくもいふはあはれなるものなり  
あけさうもいふはあはれなるものなり

史

古女尊の御月之女夫を以て神皇  
精の玉浦珠を以て神皇の御  
神皇の御玉を以て神皇の御  
神皇の御玉を以て神皇の御  
神皇の御玉を以て神皇の御

たうき屋ののりくみまはるる  
いふはあはれなるものなり

史

神皇の御玉を以て神皇の御  
神皇の御玉を以て神皇の御  
神皇の御玉を以て神皇の御  
神皇の御玉を以て神皇の御  
神皇の御玉を以て神皇の御



王能夫

徳多幸勳新新也却以通國中  
身記子あわ約朽者あまり他道道心  
我々金銀衣飾備給はる沙寔也あ  
高風如以枯心結隊有流流松浪り  
却負一衣う霜はる多道文可至月あ結

明夫ああ館黄生旅也気於方在帝王  
形ハ暗渡松雪外一段松眉落月色  
何ハい者のやまきくしちりか〜まき  
さ〜んか〜まき〜まき〜

姣女

寄向心留清あに〜外娘い家調あ  
え山幸季種〜小妹

外人不識多因事以多為難此清古  
孀姑由廣林姑孀黃如魏書家也  
其性烈中庭而從其風以院持也  
孝子直之錢侯純一好以姑死書  
友之約同古之既而亦有實  
煉藥約月環里市山清光反日

思道神又事少  
和氣

策如以之令人  
其操足理善書狀  
種種不道回火耐風  
和風先守筆  
媿慕神性古善書  
神書房  
媿慕神性古善書  
神書房  
媿慕神性古善書  
神書房

吾充之名新創靈法貴先朝靈物等  
海部之珍重能知人之心此以心通  
於水也乃其如古之得之而舞

哲由

枯木未明哲由佩之靈心滿人山  
翠松如國子子之新法隨冥丹中  
流之一生之新氣是回

備重強調以深月有格之高推入如極  
志之原若与深系志系法尔世寸久以  
安其能古之靈波屋之也之也而壽

哲人

昔为上而深也其靈若也他江河澄何靈  
起眼早受之其病力是靈心若道  
再之懷汝北維之其靈若也其靈若也

お栗葉の落し枝に喜ぶ秋の結核種  
醫了身之快心也

少お栗之うまから喜ぶ秋の結核種  
結核了日は怖れぬ事也

古くは〜 運園文 漢漢の波巻面  
孫里春子〜 猶漢曲高下月暮自

秋無母夕涼夜海を空に重き雲を  
林邊枝折る雪も先雪風福力極程強  
秋葉の落し枝に日は秋の結核種

お栗の落し枝に日は秋の結核種  
お栗の落し枝に日は秋の結核種

お栗の落し枝に日は秋の結核種  
お栗の落し枝に日は秋の結核種

交友

琴詩酒友皆拋我雪月花時獨憶君  
陽春曲調高難和淡水交情老始知  
昔年願我長青眼今日逢君已白頭  
蘭會枕前之過古廟作綿雲代之交  
張僕射之重新寸推為忘年之友  
裴文籍後同君久嘗祀部孤兒我新

君とて世に  
じーの世より  
たきやうと  
とらむじーの  
君とて世に  
じーの世より  
たきやうと  
とらむじーの

懷舊

黃壤誰知我白頭獨憶君唯將老  
季淚一灑故人文  
長夜君先去殘年我幾何秋風

滿秋渡泉下故人多

往事渺茫北都似夢舊遊零落半歸泉

蘓州舫故龍頭暗王子橋傾鷹齒斜

金谷醉花之地苑每春白而主不歸

南樓翫月之人月与秋期而身何去

王子晉之昇仙後人立祠於維嶺

之月羊太傅之早世行客墜瀆

於峴山之雲

但餘良木其摧歎遺愛甘棠勿剪謠

吟一此野中の三つめらとと  
もののころをして人をくもむ  
むしうとなはるもしとおもひといはけり  
あやしくめふもらなみのれ  
よの中ふあしのはとおもひふ人  
ままらくはらくもらるにたらるらぬ

述懷

專諸荆鄉之感激後生豫子之援  
身心為恩使命依義輕

范蠡收責勾踐乘扁舟於五湖各  
犯謝罪文公也遠遊於河上

翫其磧礫不親玉潔者不知驪龍  
所蟠習其弊邑不視上邦者未嘗  
雄之所躔

人間禍福忽離斷世上風波老不禁  
車前駮病駑駘逸架上鷹隼鳥雀高  
事之無成身也老醉鄉不立欲何歸  
范蠡收責掉扁舟而逃名謝安辭

伏孤雲而表良志

昇殿是象外之選也  
借骨不可以諧  
蓬萊之雲尚喜之天下之望也  
庸子  
不可以焚其墓園之月

於空顏駟過三代而猶沈恨  
同伯鸞  
歌五噫而將去

言下暗生消骨火  
咲中偷斲刺人刃  
載鬼一車何足畏  
梅亞三唳未為先  
楚三周醒終何益  
周伯夷飢未必賢  
かろくはてまれば  
らるるまはらん  
よの中はとくも  
くてもおま  
ふをり屋をけし  
まけ建六  
かろくはるる  
くくみゆ  
よの中  
うま  
くもす  
ま  
月  
か



慶賀

鈿佩曉趨雙鳳闕  
燿波初省一漁舡  
錢塘去國三千里  
一道風光任恣看  
想得江南諸父老  
固君鞭撻子孫多  
吏部侍郎臧侍中  
看緋初出紫微宮  
銀魚腰底碎春浪  
綠鸛衣間舞曉風  
花月一窓交首暎  
雲泥万里眼今窮  
省躬還取相知久  
君是當初竹馬童  
うづろくはなはむしうはうていつみけま  
うらまひのちみもあまうりぬか

祝

嘉辰令月歡無極  
萬歲千秋樂未衰  
長生殿裏春秋富  
不老門前日月遲

わさみはきりぎりす  
いふとたるときのしすま  
うり世とくらのやうにけふ  
あきら—

恋

あまのまはるきりぎりす  
君のきりぎりすは  
文系新抄とて—

園解杏のそと

川文見月ゆい色  
春風桃李花  
夕霞雲花思情  
菊雛小鳥  
とて

写の園中 花若艶清天 海村一枝春  
空室粉补 昔人好 不物畫 以相与 瑞  
白如雪 唯月色 如娘悦 意物如  
相恋は けらるる 一すけ せりあ  
あふと ちあとも せふとも せ  
あふと ちあとも せふとも せ  
まゝに せふとも せふとも せ  
いゝと せふとも せふとも せ  
わりは せふとも せふとも せ

かたじけなく

親身が 離れ 縁 糸 福 無 江 以 不 好 心 止  
端 半 角 と 争 け り 不 火 光 布 寄 け 才  
逢 々 聚 々 也 心 聚 々 逢 々 人 不 同  
生 考 必 成 輝 爲 未 免 梅 橙 様 示 畫  
と 聚 々 々 人 様 逢 々 々 々 日

物もみおれを流さるる白着の形  
陸親林厚波の中彩未通志を  
この中をたまたまいしあさ  
こまきいもあはれ  
世れまはゆあううかうは  
いあのみあはれ  
えうりしあはれ  
あうりあはれ  
すあのうあはれ  
あはれ

白

素白なる彩遊舟と云は鳥の  
備嘆物生く時鶴様  
銀河流即素白と見え林園  
毛髪流ゆる白髪を映え  
昔も月色に照らす

書鶴沙鷗詩一首  
唯通年續  
あけくまの月  
いさくたまけてむめの花

和漢詩詠集下

延文元年七月廿日為佳  
手本所書  
与也殊刷筆時不可  
柳奈取為家珍  
可傳來葉而已

祖師大衆院贈一息大日七の縁也懸葉

寺圖法親王

甚厚也衆書沙鷗の為恐

雀三言



